NO.82

神奈川大学　国際経営研究所　編集･発行 2025.06.01

国経研だより No.82

国際経営研究所
〒220-8739 神奈川県横浜市西区みなとみらい 4-5-3
みなとみらいキャンパス 11007
TEL 045-664-3710(内線 4100)

Institute of International Business Management

今号の内容

P.1-2　インタビューで聞く労働の歴史／南雲　智映
P.2-3　自己への思いやりを高める教育的介入／足立　英彦
P.3-4　出張道中記＃１　（2024 年ロンドン編）／石川　貴幸
P.4　国際経営研究所からのお知らせ

インタビューで聞く労働の歴史

南雲　智映

2025 年度より着任いたしました南雲と申します。どうぞよろしくお願いいたします。ずいぶん前のことですが、中学 3 年生のとき（34 年前）に、神奈川大学の工学部の先生の研究室に出入りしていたことがありました。当時、経営工学の教授のもとで、医療職だった私の母親が共同研究をしており、私は学会報告の要旨を清書する作業を頼まれたのです。当時はまだパソコンが普及しておらず、手書き原稿を解読して日本語ワープロで打ち込み、感熱紙で印刷する作業を担当し、最終的には徳島での学会にも同行しました。このとき研究者の仕事に触れた経験が、私が研究者になったきっかけのひとつになっています。先日、久しぶりに六角橋のキャンパスを訪れ、当時のことを思い出して感慨深いものがありました。

さて、私はこれまでインタビューによる労働研究を行ってきました。企業の経営者や人事担当者、労働組合のリーダー、現場の労働者、人事コンサルタントなどいろいろな人に話を聞いて、それを研究成果にまとめる作業です。インタビューのなかでも（現状の調査もいくつか手がけてきましたが）、オーラル･ヒストリーと呼ばれる手法で労働史研究を続けてきたのが私のキャリアの特徴でしょう。

私と研究仲間が行ってきたのは、歴史学の立場でのオーラル･ヒストリーです。具体的には、インタビュー対象者（語り手）の経験についての語りを音声で記録し、それを他の人たちも利用ができるよう文字に起こして整理し、冊子やデジタルデータの形で公開してきました。

オーラル・ヒストリーにはいくつかの利点があります。第一の利点は、文書史料の重要な部分がどこなのかわからないときに、文書作成者が重要視した事実を理解できる点です。要するに、文書史料を作った人に話を聞くことで、要点をつかめるようになるのです。第二の利点は、文書史料に残らない情報が明らかになることです。具体的には、重要な意思決定のプロセスや、組織内で明文化されていない慣習やルール、組織文化、他組織からの影響などです。また、組織の意思決定を語り手や組織メンバーがどのように解釈し、受け止めているかという情報も得ることができます。さらに、近年の企業や労働組合では書類のデジタル化が進んだため、将来の歴史研究者が分析できる史料が残りにくいという問題もあって、ますますオーラル・ヒストリーの重要性が高まると考えられます。第三の利点は、オーラル・ヒストリーはさまざまな集団に対して実施できることです。伝統的

な日本的企業や労働組合に残された文書史料は、日本人の男性正社員の手によるものがほとんどで、その立場から記録された情報に偏っています。そのため、女性や非正規従業員、外国人などについての研究を行う場合は、オーラル・ヒストリーの手法を用いることで、このような人たちの視点からの情報を得ることが可能になるのです。

私たちの研究グループは、25 年にわたって労働関係オーラル・ヒストリーの実施・公開を続け、のべ 300 回以上のオーラル・ヒストリーを蓄積し、「史料群」といえるものを作ることができました。もちろん、私たちはこの史料群を使って論文や書籍を書いてきましたが、最近では少しずつ他の研究者にも利用され始めています。

オーラル・ヒストリーの蓄積は、私たちのライフワークとして取り組んでいます。オーラル・ヒストリーの公開までの作業は正直面倒ですが、コツコツと 1 つずつ形にし続けていきたいと思います。そして、今後も史料群をさらに充実させていき、（私たちの死後の世代も含めて）利用者が増えていってほしいと考えています。

（所員／なぐも・ちあき）

自己への思いやりを高める教育的介入

足立　英彦

今年度着任し、教育心理学、教育実習等の授業を担当いたします足立英彦と申します。本稿では、私の研究テーマを紹介させていただきたいと思います。私は、自己肯定感や自己への思いやり（セルフ・コンパッション）を高めることにより、ストレス耐性やレジリエンス（心理的回復力）、感情のコントロール、他者への共感性を向上させることを目的とした教育的介入（講義や体験型のワーク）の実践・研究を行ってきました。主に大学の授業の中で介入を行ってきましたが、中高生や社会人を対象とする実践や研究も今後行いたいと考えております。

大学における授業という形式をとることで、多様な学生に支援を届けることができるという利点があると考えております。私はこれまで、大学の学生相談室や中学高校のカウンセラーとして様々な生徒や学生の支援を行う中で、心理的支援に関心のない人や、抵抗がある人にも予防的な支援を提供することが望ましいと考えるようになりました。カウンセリングは、多くの場合、本人の精神的エネルギーが著しく低下した状態で始まります。このような状態では問題の解決に多くの時間と労力が必要になります。また、自己否定感が強い学生は、支援を求めることに抵抗感を感じやすく、その結果、問題の深刻化を招いてしまうことが少なくありません。問題が生じてからではなく、問題が生じる前にリスクを低減させておくことで、問題の発生を予防したり、問題解決に要する時間や労力を最小化したりできるのではないかと考えました。

また、精神的健康度の高い学生であっても、卒業後のライフステージの変化によって精神的に不安定になるケースは珍しくなく、自己理解やストレス対処、セルフ・ケアなどについて学ぶ意義は大きいと考えています。加えて、メンタルヘルスに関する知識やスキルは、家族・友人・職場の同僚など、他者を支援する際にも役立ちます。

以上のことから、青年の精神的健康上のリスクを低減させる予防的教育を行いたいと考えました。そのために着目したのが、自己への受容的な態度です。精神的に健康で自己肯定感が高いように見える学生であっても、学業やスポーツのよい成績や良好な対人関係などの外的要因に強く依存している場合は、これらの支えが一時的に失

われた際、自己評価が急激に低下し、精神的に不安定になるリスクがあります。外的な成功や他者からの承認を自己肯定感の支えとして活用することができなくなったとしても、自己への思いやりが高いと、自分自身を責めすぎることなく、温かく励ます態度を維持し、情緒的安定を保つことが可能になります。近年の研究では、自己への思いやりが高い人ほど、幸福感や人生満足度、動機づけ（意欲）、身体的健康、学業成績、人間関係の良好さが高く、不安や抑うつは低いといった知見が報告されています。これは、自己への思いやりが、精神的健康の維持・増進だけでなく、精神的な成長を促進する有効な資源となり得ることを示唆しています。

私はこうした知見を、教育実践の改善へと結びつけていくことに関心を持っており、現在、他大学で心理的健康や自己肯定感の向上に関する授業を担当しております。大学進学率の高まりや、その他の時代の変化により、大学の社会的役割は変化しつつあり、今後、大学教育においても情緒的な成長や非認知能力の発達を促進する教育的働きかけの重要度はさらに高まっていくのではないかと考えております。

（所員／あだち・ひでひこ）

出張道中記＃１　（2024 年ロンドン編）

石川　貴幸

これまでの職歴から学生とのイベントなど、特に寄稿できるような出来事はなかった。どうしたものかと頭をひねった結果、出張が多かったので、「紀行を寄稿しよう」という何とも言い難い気持ちのもとに体験談を書いていこうと思う。

ロンドンへの出張は 2024 年 8 月 26 日から翌月 1 日までの日程であった。ロンドンを含めイギリスへ足を踏み入れるのは初めてであり、見るものがすべて新鮮であった。ありがたいことに本年もロンドンを再び訪れる機会を得たため、また新たな発見があると期待しているが、10 か月程度でそこまでの変化はないであろう（さっそく有料の入国前手続きが必須になったが）。

ロンドンの町並みは現代風の鉄筋ビルもある一方で、16 世紀のロンドン大火からの復興で建てられたレンガや石造りの建物など風貌はバラエティに富んでいる。またリュックを背負って歩いている人も多く、治安はそこまで悪くないことが察せられる。ごみも散乱していることはあまりなく、日本とあまり変わらない様子であった。ごみに関しては、道端にあるごみ箱の数が日本よりも圧倒的に多く、清掃の職員を失業対策として雇っていることもあり、きれいに保たれていると考えられる。このような点は日本も見習うべきであろう。

しかし、日本と大きな違いが、ホームレスの多さである。ロンドンの大通りであっても段ボールすら敷かず、そのまま横になっている人が多数見受けられた。また日本ではあまり考えられない若い女性のホームレスも多く見受けられ、経済状況の悪さが垣間見える。

経済状況に関連して、ロンドンの食事はしっかり食べようと思うと非常に高かった。どれだけ高かったかというと、羽田空港国際線ターミナルには「今半」がレストランとして入っているのだが、そこで牛すきを食べると大体 1 万円を超える。いつも踏ん切りがつかなく結局食べないで出国するのだが、「これは安いんじゃないか」と思えるほど高い。

具体例を挙げるが、朝ごはんは近所のカフェに行っていたのだが、クロワッサンは 1 個大体 550 円程度でありパ

ンはそこまで高くはない。コーヒーが 650 円ぐらいだった一方でオレンジジュースが 1000 円と高かった。たいていクロワッサンを 2 つ食べていたので朝食は大体 1800 円であった。朝マック 3 回分ぐらいである。

ほかにもイギリスといえばフィッシュ＆チップスであるが、“きちんとした味”のを食べようと思うと 1 個 4800 円する。ちなみに六本木にある Malins Fish & Chips なら 2500 円程でほぼ同じものが食べられるのでお勧めである。

また今や世界的なメニューとなった日本食は「海外から見た日本食」であり、挑戦しようと思う気も起きなかった。WASABI という持ち帰り寿司（？）のような店もあるが、並んでいるものの見た目が悪く買う気にはならなかった。「しかしせっかく海外に来たのだから一つぐらい日本食を食べよう」と思って、はたと気が付いた。そうだロンドンには一風堂がある。

実際に食べてみたのだが、本当に一風堂のラーメンであった。ただ、替え玉と緑茶をつけて、サービス料込みで 6400 円なのはいただけない。一風堂のラーメンで日英間の物価を測ると大体 3 倍ということになるから、日本はそれだけ物が安いということでもある。ちなみに普通にパスタとワイン 1 杯、簡単なサラダのディナーで 14000 円ほど取られるので、一風堂ロンドン店のラーメンもディナーとしてならば安いと考えたほうがいいのかもしれない。

結局、ロンドンでの食事事情ばかりで何も紀行文っぽくならなかった。次回はこの続きにするか、それとも翌月に行ったリスボンにするか、はたまた今年のロンドンにするかを悩みつつ今回は筆をおかせていただきたい。

（所員／いしかわ・たかゆき）

国際経営研究所からのお知らせ

■ 2025 年度研究所所員の構成数（4/1 現在）

所員（専任）	40 名
特任教員	8 名
特別所員	4 名
客員研究員	18 名

＜2025 年度新任の先生のご紹介＞

- 南雲　智映 教授（人的資源管理論/労使関係論/労働史/労働経済学）
- 足立　英彦 准教授（臨床心理学）
- 石川　貴幸 助教（企業の設備投資行動分析/無形資産/生産性）

■ 2025 年度研究所常任委員業務

所長　青木 宗明

常任委員（4 名）

伊藤　ゆりか（新規委員）
＜研究事業（講演会）担当＞

王　　中 奇（新規委員）＜出版担当＞

望 月　耕 太＜地域連携事業・HP 担当＞

宮 澤　　薫＜広報担当＞

■ 2025 年度より長期共同研究として下記開設

横浜みなとみらい学センター

代表者：中見 真也

■ 2025 年度共同研究プロジェクト/新規 2 件

研究期間：2025 年度－2027 年度

✧ 開拓者精神による公共価値の形成―協働を促す行動原理と社会システムの構築
代表者：泉水英計

✧ コモンズの創成と分配
代表者：大田博樹

■ 国際経営フォーラム No.36 原稿募集

テ ー マ：『インターナショナル』

応募締切：6 月 30 日（月）

原稿締切：9 月 30 日（火）

査読の場合は 9 月 19 日締切

申込は下記 Forms または上記 QR コードより

https://forms.office.com/r/qQ1gmj4qJr

お問い合わせは国際経営研究所窓口まで